その日、彼は守ることを思い出した 『ブラックトリガーと紅茶と共に』

mimin

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語は、異常なほど紅茶が好きなＳ級隊員。
守谷攻兵（もりやこうへい）の話です。
某おせんべいを配る人と似ていても、違います。
ノーマルトリガーも所持していて、主に射手です。
主にというのはブラックトリガーが影響しています…
サイドエフェクト持ちです。
それも読み進めていくと判明します。
色々と足りない部分等も、あるかもしれませんが暖かい目で見守って頂けると幸いで

す。

感想等、待ってます！

※Ｒ１５、残酷な描写は保険です。本家でも、首が切れたりもありますので…

目次

守屋攻兵とボーダー
始まり ―― 1
三雲と守谷 ―― 11
迅と悠真 ―― 22
那須隊と守谷 ―― 34

守屋攻兵とボーダー

始まり

守谷攻兵（もりやこうへい）１７歳
この名前を聞いたことがあるだろうか？
ある組織では、とても有名な名だ。
好きなものをよく勧め、よく飲んでいる。
そう、
『紅茶』を

「今日の予定は…防衛任務か…」
そうつぶやくと、守谷は二種類のトリガーと魔法瓶を手に警戒区域へと向かう。
～警戒区域～
サイレンが鳴り響いている。

『ゲート発生、ゲート発生。ボーダー基地より全市民に通達します。警戒区域内にゲートが発生します。近隣の皆様はご注意ください。』

バムスターと一人のボーダーが戦っている。

しかし、まったく歯が立っていない。

「あちゃー、弱いな…ってかあれC級だよな？規定違反だぞ…」

守谷は、ため息をつきながらも白いトリガーを手にする。

「トリガー起動！」

次の瞬間、黒を基調とした服に身を包む。

「アステロイド！」

守谷はキューブ上のものを、バムスターへと打つ。

うまく目に当たり一発で倒した。

「ふう。大丈夫か？」

「あ、ありがとうございます！」

「あ、俺はたまたま一般人を助けただけだから。C級隊員とか見てないから。」

そういうと守谷は、後ろにいる身長の小さい子供に目を向ける。

「お前は…その隊服見たことないな。何者だ？お前？」

「俺は、空閑悠真。ゲートの向こうから、おやじの知り合いに会いに来た。お前らが言うところの近界民だ。」
「いやいやいや、待て待て待て。冗談だよな…？」
「冗談じゃないよ。本当だ。」
「…俺は何も聞いていない。わかったら早く行け！」
空閑とC級隊員は、足早にその場から立ち去る。
「あーあ、なんかめんどくさいことになったなぁ。」
そこへ、二人の男が現れた。
「やっぱり、守谷か。」
「よう、槍バカと三輪。一足遅かったな。」
「誰が、槍バカだ。紅茶バカ。」
「紅茶、飲むかー？今日はレモンティーだぞ。」
「守谷、米屋。それくらいにしておけ。このトリオン兵は、おまえが倒したことで間違いはないな。」
「おう、正真正銘俺が倒しましたよー。」
「わかった。米屋、仕事に戻るぞ。」
「了解。じゃあな、紅茶バカ。」

「うっせー、槍バカ。」
そういうと、三輪と米屋は去っていった。
「あぶねー。見つかったら衝突は避けられなかったな。特に三輪なんてな。」
守谷は、さっきの空閑の雰囲気が気になっている。
「近界民か…ちょっとだけ気になるな…」
守谷は、家へ帰らず本部へと向かう。
三輪と米屋は、不良と思われるヤツらを保護していた。
「お、俺ら、友達に連れられて、あ、遊んでたらいきなりゲートが開いて、近界民に襲われた被害者なんっすよ!」
「そ、そーなんです。む、無理やりです!無理やり!」
「…それは、お前らと同い年か?」
「そ、そうですけど?」
三輪は、睨むように空を見上げている。
「…守谷め。何を隠している」

～数日後～

警戒区域外に、近界民が出たとの情報が、入ってきた。
「そこは、あのC級の通う中学じゃねーか…」
守谷はあのC級と、近界民について少し調べていた。
三雲修。15歳。メガネをかけていて、学校にはボーダーだと言うことを隠している。
「あの近界民とも繋がりがありそうだし、見に行ってみるか。」
〜学校〜
「あれは、嵐山隊！」
嵐山隊。テレビでも、引っ張りだこの広報担当だ。
「嵐山隊、カッコイイーー！」
「さすが、嵐山隊だーー！」
四方八方から声援が飛び交う。
「木虎さんって美人ーー！」
即座に木虎は、反応した。
「ありがとうござ…って、守谷先輩じゃないですか…」
「よー、木虎。バリバリの営業スマイルだなー。」
「ほっといて下さい…」

そういう木虎の近くには、倒されたトリオン兵の姿。
「これは、嵐山隊がやったのか…？」
「いえ、私達じゃありません。まだ分からないんです。誰がやったか。」
「…あなたは！」
そう言って近づいてきたのは、三雲だった。
「おー、三雲くん。元気だったか？」
「はい、一応。」
「これは、まさか君が…？」
「…」
「守谷！この子と知り合いか？」
「嵐山さん！い、いやたまたまこの前基地で知り合ってなあ…ね？三雲くん？」
「は、はい。そうです…。」
ぎこちないやり取りをしながらも、なんとか切り抜けた。
「君が、これをやったのか…？」
「はい…。」
「…ありがとう。君がいなかったら犠牲者が出ていたかもしれない。うちの妹とと弟もこの学校なんだ。」

嵐山は、弟と妹を見つけると飛びついて行った。
「いや、三雲くん。凄いね、C級のトリガーでトリオン兵を一撃。」
「守谷さん、実は…」
「ここでは、言わない方がいい。人目が多すぎる。」
「…ってことは、分かってるんですね。」
「あぁ、大体予想はつく。君の戦いを一回見たからね。」
「…」
「ってか、あっち見てみろよ、三雲くん。木虎の目を。」
三雲は、木虎へと目を向ける。
木虎は、今にも噛みつきそうな目をしていた。
「あれは、軽くキレてるな。C級が、カッコつけたことを気に食わないんだろう。」
「カッコつけたって…そんな…。」
「あ、いいこと思いついた！」
守谷は、目を光らせる。
「おい、木虎。流石のお前でも、ここまで損傷させることは出来るか？しかもC級トリガーで。」
「スコーピオン」

木虎は、手から剣のようなものを出し、トリオン兵へと近づく。
そしてそのまま、切りつけトリオン兵を余計損傷させた。
「…出来ますけど。まぁ、私は訓練用トリガーで戦うような、馬鹿なマネはしませんけど。」
高圧的な、態度で三雲に話す。
「そもそも訓練生は、訓練以外でのトリガーの使用は禁止されています。規則に従って罰せられるべきです。」
「人を助けた人にそこまで言うか?普通…」
木虎が、守谷を睨む。
「おぉ、怖っ。」
三雲は、何かを考えている。
「今更、悔いても遅いわよ。これだから訓練生は。」
木虎が、勝ち誇ったような顔をしている。
守谷が、何かを言おうとした瞬間。
「何で、お前遅れてきたのに、偉そうなんだ。」
「言うね。」
「日本では、誰かを助けるのに許可がいるのか?」

「それは、要らないわ。だけどトリガーを使う時は別よ。だって、トリガーは、ボーダーのものだもの。」
「それは、違うだろ。トリガーは、近界民のものだ。」
　現場が凍りつく。
「お前らは、近界民に許可取って使ってんのか？ってかお前、修が褒められるのが気に食わないだけだろ。」
「はいはい、そこまでにしとけ、木虎、空閑。みんなの前で、みっともないぞ？」
「守谷先輩、でもこいつが！」
「お前が処罰決めるんじゃないんだから、ここでとやかく言っても始まんねーぞ。」
「守谷の言う通りだ。三雲くん、今日中に本部に出頭すること。俺からも処罰が重くならないように、力を尽くすよ。」
「よし、終わり。じゃあ、後は嵐山隊に任せた。俺は、家に帰ってミルクティーでも飲むよ。」
「ははっ、相変わらずの紅茶好きだな。守谷も。」
「まぁねー。」
　そう言い残して、守谷は家に帰った。
『あれは、明らかに三雲ではない、空閑か…。訓練用トリガーであそこまで出来るとは…

少しだけ面白くなってきたな…』

そんなことを考えながら、ミルクティーを飲んでいた。

～数時間後～

電話がなっている。

「せっかくの学校休みに誰だ？」

そこには、忍田本部長という文字。

「忍田本部長？こんな時に何の用だ？」

「こちら、守谷。忍田さんどうしました？」

「市街地にイレギュラーゲートが発生した！今からでも迎えるか？お前の家から近い！」

「イレギュラーゲート…。了解。すぐに向かいます！」

「頼んだぞ。」

電話を切る。

「おいおい、イレギュラーゲート多すぎだろ…。」

守谷は、特製ミルクティーと、トリガーを手に現場へと向かう。

三雲と守谷

「さて、現場に向かいますかね。」
いつもの、トリガーと魔法瓶を手に家を出る。
『トリガー起動！』
昨日とは、違い白を基調とした服に身を包む。
「現場まではこっちのほうが早いな…」
守谷は、キューブ状のトリオンを出す。そして、その上に『乗った』
「さ、行くか。」
そのまま、現場へ向かう。

～現場～
「よっと。」
静かに降りる。そして、トリガーを解除した。
「これは、ひどいな…」

トリオン兵が空を飛んでいる。
「あれは…新型か？」
近くに三雲の姿を見つける。
「三雲！あいつはなんだ？」
「…守谷先輩！」
「空閑はどうした？まさかトリガーを使ってないよな？」
「それは…とにかく、あれと木虎が戦ってます！行ってください！」
「木虎が？わかった、ここは任せたぞ三雲！」
「はい！」
『トリガー起動！』
黒い服に身を包む。
「よし、行くか…」
『グラスホッパー』
守谷は、板のようなものを使い、反射して空中を上がっていく。
「あっちか。」
トリオン兵のほうへ、上手く移動していく。
「よし追いついた。」

木虎は、背中の上に乗っていた。周りには柱のようなものが立っている。
「ってほとんど、倒してんじゃん。」
守谷は、背中の上に飛び乗る。
「止まって！止まって！」
「何やってんの？」
「守谷先輩、こいつ自爆する気です！どうにかこの柱を…！」
「…わかった。木虎、シールドちゃんと貼っとけよ…」
両手にキューブ状のものを出す。
「合成弾！」
「ご名答。」
『徹甲弾（ギムレット）』
キューブは、一つ一つの柱を破壊していく。
「木虎、降りるぞ！」
「…はい！」
背中から飛び降りる二人。
「最後に一発！」
『メテオラ』

トリオン兵は、粉々になった。
「ケガしてないか？木虎？」
「…はい、大丈夫です。ありがとうございます。」
「守谷先輩すごいな。粉々だ。」
「おぉ、遊真もいたのか。」
「おう、最初からいたぞ。」
「ってか、あっち見てみろよ。」
そこには、修がいた。
「君のおかげだ！」
「本当に助かった！」
「…いえ僕は当たり前のことをしただけですから。」
木虎は不満そうな顔をする。
「…そんなに市民相手にポイント稼ぎ？」
「あっ、彼女です！近界民を倒したのは！」
「そうなのか！」
「嵐山隊の木虎じゃん！さすがＡ級隊員だ！」
「ほらな、言っただろ。お前とじゃ勝負にならないよ。見ているものも違うからな。」

「木虎、一般人からこういわれてるぞ。」
「…確かにただのC級隊員じゃなさそうね。」
「でも結構お前もすごいな。あの魚倒したんだもんな。」
「違う。倒したのは、守谷先輩。私は止められなかった…」
「それは、違うだろ。倒したのは、木虎だ。俺は、そのサポートをしただけだ。お前はすごいよ。」
「も、守谷先輩!?何を言ってるんですか!」
「だって、事実だろ?」
　その時町の住民から、怒りの声が上がる。
「何が助かっただ!うちの店は壊されちまったんだぞ!」
「ボーダーは何をしているんだ!」
　木虎は、修の前に立つ。
「近界民による、新手の攻撃です。損害の補償に関する話はまた後々に発表があります。」
　木虎が、住民たちを避難させている。
「イレギュラーゲートを、なくさないとな…」
「守谷先輩…」

「とりあえず、本部に行こう。俺もついていく。」
「ありがとうございます。」

〜本部〜
木虎がトリガーを使い、ドアを開ける。
「ほう、トリガーがカギになっているのか。」
「そうよ、ここからはボーダー隊員しか入れないわ。」
「じゃ、俺はここまでだな。何かあったら、連絡くれ。」
「わかった。」
「じゃあな、遊真。」
「おう、守谷先輩。」
エレベーターで下に降りる。
「さっきの戦闘中、ほかの場所でもゲートが開いたそうよ。」
「そうか、被害が広がらなきゃいいけど。」
「大丈夫だ、修。ボーダー隊員は優秀だ。」
「…はい。」

～とびらの前～
「じゃあ、ここからは、俺に任せとけ。木虎。」
「はい。お願いします。」
「…お願いします。」
「大丈夫だ。修。心配するな。」
とびらの中に入る。二人。
「守谷、三雲修を連れてきました。」
「守谷もいたのか。ちょうどいい、座ってくれ。迅が来たら始める。」
「…迅さんが！」
～数分後～
「迅悠一。お召しにより参上しました。」
三雲が顔を見る。
「あれ、守谷もいたのか。…で君は？」
「三雲修です。」
「三雲君ね。」
「揃ったな。それでは本題に入る。イレギュラーゲートについてだ。」
「待ってください。まだ三雲君の処罰について、決定していない。」

「結論？クビだよクビ。重大な隊務規定違反だ。」
「真似されたら困りますからねぇ。」
「馬鹿が見つかった。処分する。それだけの話だ。」
「おぉ。すごい言われようだな。」
「待ってください。三雲君は、二度人を助けている。むしろB級に上げるべきじゃ。ありませんか？」
「私も守谷の意見に賛成だ。木虎が、三雲君の働きは大きいと報告している。」
三雲は、驚く。
「へぇ、あの木虎が。」
迅も反応する。
「嵐山隊によると、トリオン兵を一人で倒している。これだけの働きができるのは貴重だ。」
「本部長の言うことには、一理あるが、ボーダーのルールを守れない人間は、わたしの組織に必要ない。三雲君、もし今日と同じようなことが起きたらどうする？」
「それは…目の前で人が襲われていたら助けに行くと思います。」
「ほらみろ、まるで反省しとらん、クビで決まりだ。」
「三雲君の話はもういいでしょう。」

根付さんが、イレギュラーゲートについて、話しはじめた。
「…これだけの被害が出ると、三門市を去る人も増えるでしょう。損害補償金だって…ねぇ、唐沢さん?」
「金はいってくれれば集めてきますよ。しかし、これほどだとスポンサーも離れますね…」
「そんなことはわかってる。しかし開発員総出でも原因がつかめんのだ。今はトリオン障壁でゲートを強制封鎖しておるが、それも46時間だけだ。」
「…んでお前が呼ばれたわけだ。できるか?」
「イレギュラーゲートの原因を見つければいいんでしょ?その代わりと言っちゃぁなんですが、彼の処分を俺らに任せてもらえませんか?」
「どういうことだ。」
「彼がかかわっているのか?」
「はい、俺のサイドエフェクトがそう言ってます。」
「でも、守谷はなぜ?」
「守谷もかかわっているからです。」
「いいだろう。好きにやれ。解散だ。」
迅が席を立ち、三雲に話しかける。

「さて、よろしく頼むぞメガネ君。」
「遊真にもよろしくな。修。」
「はい！」
　迅が鬼怒田や根付などと話している。
「あれは、迅さんに任せておいていいか…」
　守谷は、部屋を出る。
「さて、家に帰って寝ますかね…」
　～会議室～
「三雲君。一つ聞いていいか？」
「はい。」
「昨日、近界民が倒れていたんだが、その付近に君の同級生がいた。もしかして、あれは君がやったのか？」
「い、いえ。あれは守谷先輩に助けてもらいました。」
「…そうか。ありがとう。原因が分かってよかった。」
「はい。では、失礼します。」
　三雲がドアを出る。
「…釣れませんでした。あの不良たちによると、三雲のほかに、小さくて強いやつがいた

そうです。C級の訓練用トリガーであれを倒せるのは少しおかしいと思ったのですが…
」
「近界民と接触している可能性があるのか…。よし、三輪隊で三雲を見張れ。」
「はい。」
三輪は、唇を噛む。
「守谷め…何を考えているんだ！」

迅と悠真

〜三雲の家の前〜

三雲がどこかへ行く。

「あのメガネボーイが、ネイバーとつながってるの？見かけによらないねぇ。」

三輪と米屋が話している。

「よぉ、こんなところで何してんだ？」

「げ…紅茶バカ！」

「守谷…」

三輪が守谷を睨む。

「…防衛任務だ。たまたま、ここにいただけだ。」

「そーかそーか。」

そこに一人の男が現れる。

「ぼんち揚げ、食う？」

「迅さん！」

「守谷もいたのか。三輪隊の二人は、今日の午後から大仕事があるから、基地に戻っとけ

よ。はいこれ、命令書。」
　迅は命令書を渡す。
「よし、守谷行くか！」
「はい！」
「じゃあなー」
　迅と守谷は歩き出す。

　～数分後～
「修。おはよう。」
「メガネ君。おはようー。」
「お、おはようございます！」
　迅は歩き続ける。
「この先に、イレギュラーゲートの原因を知る人物がいる。」
「修がよく知ってる人だよ。」
「まさか…」
「なに？守谷、もう知ってんの？」

「まぁ、大体はね。」
にやにやする守谷。
～最初に修と米屋が出会った場所～
「ここは…」
「お、覚えてるか？」
「そりゃあ…」
そこには、遊真がいた。
「空閑？」
「やっぱり、遊真か。」
「修、それに守谷先輩。それと？」
「俺は、迅悠一。よろしく！」
「そうか、あんたが噂の迅さんか。」
「お前ちっちゃいなぁ。」
「俺は空閑遊真。背は低いけど、１５歳だ。」
「空閑遊真。遊真ね…お前、向こうの世界から来たのか。」
「さっすが、迅さん。よくわかったね。」
遊真は遠ざかる。

「待て待て、そういうあれじゃない。」
「そうだ、遊真。迅さんは俺と似たタイプだ。」
「俺は、近界民にいいやつもいることも知っている。俺のサイドエフェクトがそう言ったから聞いてみただけだ。」
「ほぉ。」
「迅さんのサイドエフェクトって…?」
「俺には、未来が見えるんだ。少し先の未来が。」
「未来!?」
「昨日、メガネ君がこの場所で、誰かと会ってる未来が見えたんだ。」
「空閑!原因を突き止めたのか!?」
「うん、ついさっき。犯人はこいつだった。」
「なんだそいつは!トリオン兵?」
「そこからは、私が話そう。」
　黒い浮遊している機械のようなものが出てきた。
「私はレプリカ。遊真のお目付け役だ。」
「おぉ、これはどうも。初めまして。」
　そこから、レプリカがこのトリオン兵について話し始めた。

これは、偵察用のトリオン兵で『ラッド』ということ。
ゲート発生させる原因だということ。
町に広がっているということ。
「いやぁ、めちゃくちゃ助かった。ここからはボーダーの仕事だ。」
「ですね。」
「よし、守谷急ぐぞ！」
迅の言葉を、聞き流しながらトリガーを起動し黒い服に身を包む。
「じゃあな、修、遊真。」
「おう、またな。守谷先輩、迅さん。」

～本部～
「よし、じゃあ俺は伝えてくる。」
「お願いしますー！」
迅は、早歩きで行った。
「あれ、守谷じゃん。何してんの？」
「よう、米屋。ここから、忙しくなるぞー。」

「はぁ？いま、任務から帰ってきたばかりなんだけどー。」
「グダグダ言うなー。そのうち全隊員に出動命令が出るから覚悟しとけよー。」
「まじかよー。」

数分後、すぐにそれは本当になった。
そして、昼夜かけてラッドの駆除が行われた。
何とか駆除できたものの…
「つ、疲れたぁぁぁぁ！」
「何言ってんだ、米屋。」
「お前はよー、ブラックトリガー使って本部から狙い撃ちだもんな…」
「ふっふっふっ。」
「ずりぃ。」
「まぁ、そう言うなって。ピーチティー飲むか？」
「いらねーよ。紅茶バカ。」
「槍バカには、言われたくねーよ。」
そんな会話をしていたら。迅が現れた。

「迅さん。お久しぶりです。」
「よぉ、米屋。それに紅茶バカ。」
「迅さんまで…」
　米屋は笑い、守谷は落ち込んでいる。
「まあまあ、朗報だぞ守谷。」
「…？」
「メガネ君を、B級に上がらせる。」
「本当ですか！迅さん！」
「あぁ、本当だ。じゃ、詳しいことはまた今度ー。」
　迅は、会議室のほうへ歩いて行った。
『近界民。ここから、どうなるのか…。ボーダーが、簡単に見逃してくれるとは、思えないしな…』
「おい、聞いてんのか？」
「あ、わりぃ。聞いてなかった。そう言えば、今、A級の人たちって遠征に行ってるんだよな？」
「急にどうした？そうだけど。」
「…」

『A級が帰って来たら隠しきれないかもな…。』
「あ、俺この後三輪隊で話あるから、行くわ。」
「お、おう。」
　米屋は、そのまま歩いていった。
「あ、いたいた。」
「熊谷？久しぶりだな。」
「うん。久しぶり。」
「俺に何か用でも？」
「そうそう、明日空いてる。」
「空いてるけど…。ま、まさかお前」
「何考えてるかわからないけど、否定だけはしとくわ。」
「なんだ…」
「明日、訓練に付き合ってくれない？」
「俺に？ま、いいけど…。志岐はどうすんだよ？」
「なんとかなるでしょ。別に初めましてじゃないんだし。」
「そっか。わかった。いいよ、明日はちょうど非番だしね。」
「そっか。サンキュー。じゃあ、明日待ってるわ。」

「おう。」

『那須隊。何度も一緒に防衛任務をしたことがある。隊長の那須は、俺と同じタイプの、シューターで、B級にしてはかなり筋がいい。変化弾（バイパー）の弾道をリアルタイムで引けるのは、出水と那須と守谷くらいだ。合成弾を、教えたらできるかもな…。』

そんなことを、考えながら家へと向かう。

「明日も、楽しそうだな…。」

～会議室～

「まさか、ブラックトリガーとは…。」

「なぜ、今までこんな大事なことを黙っていたのかね?」

「そりゃあ、黙っていたらもっとややこしくなってたでしょ。」

「むぅ…」

「それに、近界民は修と仲がいい。仲間にすれば、大きな戦力になると思いますけど?」

「確かに、ブラックトリガーは大きな戦力だ。…ブラックトリガーにはブラックトリガーだ。迅、お前に近界民の始末とブラックトリガーの確保を命じる。」

修が迅の横顔を見つめる。

「会議は終わりだ。わかったら、すぐに取り掛かれ。」
「それは出来ません。」
「何…？」
「どういうことだね。」
「俺は玉狛支部の人間です。林道支部長を通してください。」
「結局は同じことだろうが。」
「林道支部長、命令したまえ。」
「やれやれ、支部長命令だ。迅、ブラックトリガーをとらえてこい。」
「はい。」
「ただし、『やり方はお前に任せる』」
「了解、支部長（ボス）。実力派エリート、迅。支部長命令により任務を遂行します。」
　城戸は、林道を睨む。
「ご心配なく。うちの隊員は優秀だから。」
「行くか、メガネ君。」
「はい！」
　唐沢さんが、口を開く。
「君の友人は何が目的なんだ。それが分かれば交渉しやすい。」

「目的…。そういえば父親の知り合いがボーダーにいて、会いに来たと言ってました。」
「知り合い？誰のことだ…？」
「名前は、わからないのですが…」
「曖昧すぎて何にもわからん。」
「その父親の名前は？いや、君の友人本人の名前でもいい。」
「父親の名前はわかりませんが、本人の名前は…『空閑遊真』です。」
「空閑！」
「空閑？」
「空閑…。空閑だと？」
　半分の人間が反応した。
「その父親の名は、空閑、空閑有吾か？」
「空閑、何者ですか？」
「有吾さんは、旧ボーダーの創設期のメンバーだ。」
「三雲君、その子の父親は今どこに？聞いてないか？」
「…亡くなったと聞いてます。」
「そうか。しかし、そういうことならこれ以上部隊を繰り出す必要はないな。有吾さんの子と争う理由などない。」

「まだ、確認できたわけではない。」
「迅、三雲君。つなぎを頼むぞ。」
「はい！」
「それでは、進展があったら報告するように。」
会議室から、退室する二人。

那須隊と守谷

～ボーダー本部～

「あれ、那須じゃん。ちょうど今、向かおうと思ってたとこ。」
「そうなんだ。今日はわざわざ付き合ってくれてありがとう。」
「いやいや、俺なんかでよければいつでもいいんだけどさ。」
そんな話をしながら、作戦室へと向かう。
そこへ、木虎が現れる。
「お、木虎じゃん。今日は非番？」
「違いますけど。お二人は暇そうですね。」
「なんだその言い方？」
「忙しいので失礼します。」
木虎は確実に怒っていた。
「なんで、あんな怒ってるんだよ…。」
「もりもり、木虎ちゃんに何かした？」
「いや、何もしてないと思うけど…？」

那須は横で滅多に見せないような顔で笑っていた。

～那須隊作戦室～
「おいっす。守谷です。」
「あれ、玲と一緒だったんだ。」
「そこであってな。」
「じゃあ、全員そろったし始めようか。」
「ちょいまち。志岐どこ行った？」
「あれ？さっきまでいたんだけど…」
「まさか…」
　デスクの下をのぞき込む。
「ここで何してんだよ…。」
「…」
　那須隊のオペレーター、志岐はそこにいた。
「小夜ちゃん？何してるの…？」
「やっぱ、こうなるっつったろ？熊谷？」

「はぁ、佐代子。もりもりと会うの初めてじゃないんだから…」
「…年上の男性は、無理です。無理無理無理。」
志岐の顔は、疲れ切ったようになっていた。
「…しょうがない。とりあえず、始めるぞー。」
仮想訓練室に入る。
「ってか、これ誰が操作するんだよ…」
「私行ってきます！もりもり先輩！」
「そうか、日浦頼んだ。」
日浦が訓練室を出ていく。
「…なんで俺の呼び名もりもりで、安定してんだよ。」
「私は、守谷って呼んでるよ。」
「…那須は？」
「だって、呼びやすいし小夜ちゃんがそうじゃないとオペレーターできないって言うじゃない？」
「…。しょうがないか。」
「あたしも、もりもりって呼ぼうか？」
「完全に、遊んでんだろ…」

日浦が帰ってきた。
「もりもり先輩！志岐先輩、何とか、やってくれるそうです！」
「そうか、よかった。志岐ー、市街地Ａで頼む。あと、緊急脱出ありで。」
「…はい。」
マップが、普通の市街地へと変わる。
「よし、とりあえずトリオン体になるか。って那須隊はもうトリオン体か。」
『トリガー起動！』
黒い服に身を包む。
「あれ、もりもり先輩、ブラックトリガーじゃなくていいんですか？」
「まあ、最初はな。じゃあ、全員でかかってきて。一分後に開始な。」
「え、先輩一人対!?」
「茜ちゃん。もりもりをなめないほうがいいわよ。」
「おしゃべりはそこまでだ。始めるぞ。」
『戦闘開始』
日浦が、場所につく。
那須隊は、スナイパー、シューター、弧月という組み合わせ。
なので、目の前には弧月を持つ熊谷とその後ろにシューターの那須が続く。

「さて、どうするか…」
「さすがに、3対1だと厳しいでしょ。」
「まあな…。日浦は、バッグワームを使ってるのか。」
「(玲、援護をお願い。)」
「(わかった。熊ちゃんに任せる。)」
トリオン体の内部通話で、話す。
そして、熊谷が弧月で守谷に襲い掛かる。
「よっと、やっぱりそう来るよね。上空から攻めるか。」
『茜!狙撃準備!』
志岐が、日浦に指示を出す。
『グラスホッパー』
アステロイドの準備をしながら、上空へジャンプする。
「了解です!」
イーグレットを構える。
守谷が攻撃しようとした瞬間、イーグレットで打つ。
『防御形態(ガードモード)』
守谷は、即座に攻撃を取り消し、一点に絞ってシールドを展開した。

それを弾が届く前までに。
「日浦。みーっけ。」
「なんで…。イーグレットが防がれた…？」
『グラスホッパー』
緑色に光る板を発生させ、上空に上がる。
ビルの上に、日浦を確認すると、『グラスホッパー』を使い追い詰める。
「追いついた。」
笑みを浮かべ近寄る。
「（熊ちゃん！カバーに入って！）」
「（了解！）」
『炸裂弾（メテオラ）』
ビルを、破壊しにかかる。
『通常弾（アステロイド）』
弾は、日浦の心臓部分に当たる。
『緊急脱出（ベイルアウト）』
「一歩、遅かったな。熊谷。」
熊谷は、弧月を構える。

「あたしは、一筋縄ではいかないよ。」
「それは、どうかな…？」
『通常弾（アステロイド）』
　熊谷に向けて、放つ。
　余裕でかわす、熊谷。
「それだけ？」
『炸裂弾（メテオラ）』
　地面に向けて放つ。砂埃が舞う。
「くっ、どこに行った？」
「後ろだよ。」
「っ…！」
『通常弾（アステロイド）』
（この距離なら…）
『シールド』
　熊谷をシールドが守る。
「玲、ありがと！」
「ここから、たたみかけるよ！」

「揃っちゃったか。仕方ない…。」
片手に『通常弾（アステロイド）』、もう片方の手に
「スコーピオン？」
「ご名答。」
アステロイドを放つ。
「（熊ちゃん！どんどん攻めるよ！）」
「（了解！）」
熊谷が、弧月で攻撃する。
「スコーピオンで、受けるのは無理よ！」
『グラスホッパー』
「え？」
緑色の板を踏み、熊谷の後ろに回り込む。
「これで、終わりだ。」
スコーピオンで、心臓部分を突き刺す。
『緊急脱出（ベイルアウト）』
「さ、あとは那須だけだな。」
「もう勝負は、決まっているわ。」

守谷の、後ろから『変化弾（バイパー）』が飛んでくる。
「なっ…」
命中する。
「よし！」
「まあ、考えはよかったけど、俺のサイドエフェクトの前では効かないね。」
「そんな…」
『徹甲弾（ギムレット）』
那須の体を貫通する。
『緊急脱出（ベイルアウト）』

～作戦室～
「あれ、なんなんですかー…」
「まあ、そう落ち込むな。日浦。」
「落ち込みますよぉ…。すぐにやられちゃったんですよ？」
「まあまあ、茜。今日は、特訓のために呼んだんだから。」

「あの、仕組みが気になりますー！」
「俺のサイドエフェクトは…」
『完全防御能力』
「って言うんだけど…。あんまりしっくりこないよね。」
「はい…。」
「この能力は、2つのモードがある。一つ目は、防御形態。さっきみたいなやつで8割防御にトリオンを使うやつ。二つ目は、完全防御形態。」
「何が違うんですか？」
「何が違うかと聞かれれば、色々あるな。シールドの強度だったり防御に対する。反応の差だったりね。例えば、アイビスとかイーグレットとかだったら防御形態で充分対処出来るけど、ライトニングになると防御形態じゃ対処出来ないかな。」
「すごいですね…。完全にチーム向けって感じですね。」
「まぁ、そうだな。細かく説明するとまだあるけど大まかにはこんな感じだ。」
「そんなの、スナイパーでどーやって対処すればいいんですか…。」
　日浦が、諦め半分で質問する。
「だから、そういうのを考えるために今日、俺が来たんだろ？」
「あ、そうだった。今日、特訓するために読んだんだった。」

「…呼んだ張本人が何忘れてんだよ…。」
「ごめんごめん。」
「じゃあ、まずは日浦から始めるか。」
「はい！お願いします！」

～訓練室～
「よし、始めるか。」
「お願いします！」
やる気満々の日浦。
「日浦は、狙撃能力がそこそこ高い。」
「そりゃあ、奈良坂先輩に教えてもらってますから！」
「へぇ、奈良坂にねぇ。」
「はい！」
「狙撃能力が高いのは、いいんだがさっきみたいに近づかれたり機動力が高かったりすると対処するのが難しいだろ？」

「…はい。」
「そこで、日浦にある提案がある。」
「なんでしょう?」
「『グラスホッパー』を使わないか?」
「えぇー! 私がですか!?」
「そうだ、『グラスホッパー』で相手の裏をかいてイーグレットやアイビスで撃つ。恐らく、初めてで対処出来る奴はいないだろう。」
「おぉ、かっこいいですね!」
「ただし、使い方がかなり難しいのでちゃんと自分で練習出来るのならな。」
「が、頑張ります…。」
「よし、なら教えよう。」
　そこから、数十分程度日浦に『グラスホッパー』の使い方を教えた。
「…疲れたぁ。」
「まぁ、初めてにしては上出来だな。銃を持っている分バランスは取りにくいかもしれないが、決まれば1点取れるだろう。」
「はい!」
「じゃ、頑張って練習して実戦で使って下さいな。」

訓練室を出る守谷。

「さて、次は熊谷だな。」